

# 図書館だより

2月号

定時制図書館



図書館だより2月号をお届けします。  
2月に入り、後期もあと少しとなりました。  
まだまだ厳しい寒さが続くようですので、  
風邪を引かないよう手洗い・うがい等の  
予防を徹底しましょう。



今月もお二人の先生に「お気に入りの1冊」について  
お聞きしました。

国語科 和田倫周 先生

『深い河』 遠藤周作著 講談社刊

遠藤周作といえば、ユーモラスな「孤狸庵（こりあん）先生」シリーズから、深いテーマを描くシリアスな作品まで、多彩な作風を持つ作家として知られています。

その中でも、特に『深い河』は、皆さんにぜひ読んでほしい一冊です。

物語は、さまざまな人生の悩みや葛藤を抱える人々が、インドのガンジス川に向かう旅を通じて、それぞれの「救い」や「再生」を模索する姿を描いています。

遠藤作品に共通するテーマである「人間の弱さと希望」、「信仰と生きる意味」が、この作品では特に深く掘り下げられています。

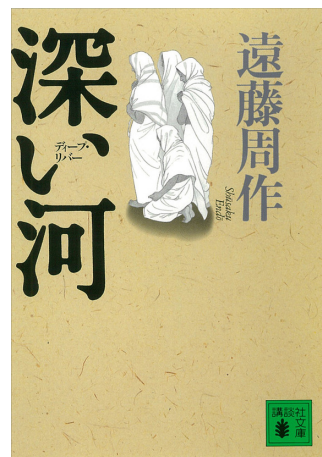
私は20代の頃、この『深い河』が執筆されている時期に遠藤周作ご夫妻にお会いする機会がありました。

お二人はとても気さくで温かい方々であり、短い時間でしたが、「生きる」ということについてお話しできたことが今でも心に残っています。

その時の言葉が、『深い河』の根底に流れるテーマそのものだったのだと、後から感じました。

遠藤周作の作品を読むことで、人間の本質について考えるきっかけを得られるだけでなく、彼の軽妙なユーモアや変なおじさんの側面、人生に対する優しさにも触れることができます。『深い河』は、あなたの心の奥深くに問いを投げかけると同時に、その問いへの答えを探す旅へと誘ってくれるでしょう。

ぜひ、図書館で手に取って自分だけの「深い河」を見つけてみてください。



国語科 橋本正恵 先生

『てぶくろを買いに』新美南吉：作、ひろのみずえ：絵



私は学校というところが非常に苦手で、苦しくて、よく学校を休んでいました。

そんな私に母は「本はいつでもあなたの友達になってくれるんだよ。本と友達になってみたら？」といろいろな本を読むように勧めてくれました。

時には読み聞かせもしてくれましたが、基本的に私はひとりで部屋の隅で本を読んでいることが多かったように思います。

小学校は多くの人がいて（当たり前なのですが・・・）そこに入ることがものすごく大変で、「人とふれあう」ことは当時の私にとって、非常に勇気のいることでした。

小学校一年の冬の寒い日、母が一冊の本を私に読んでくれました。

それが「てぶくろをかいに」という本です。

「ごんぎつね」の作者である新美南吉さんのこのお話は、人間にだまされ、心に深い傷を負ったお母さん狐と、その子どもの狐のお話です。

寒い日お母さん狐は、子どもの狐に手袋を買ってやりたいと思いました。

でも、人間が信じられないお母さんは街まで行くと子どもの狐の片方の手だけ人間の手に化けさせます。

人間は怖いから絶対に人間の手の方だけを出すように念を押します。

しかし、子ぎつねは間違って狐の手の方を出してしまいます。

お店の人は「狐が化かしに来たか。」と思いますが、子ぎつねがちゃんとお金を持っていたので黙って手袋を渡してくれました。

お母さんのもとへ帰った子ぎつねは「人間はこわくなかったよ。」とお母さんに話し、

「そうなのか。人間は本当にいいものなのかしら。」と話しながら家に帰ります。

このお話を読み終えると、母は「どう？人はいろんな人がいて、あなたに合う人もいればそうじゃない人もいる。

どんな人かは会ってみないと分からないけれど、そんなに怖い人や嫌な人っていないものなんだよ。」と話してくれました。

その後も私はなかなか学校へ行くことができませんでしたが、小学校三年生の教科書にこのお話が載っていて、「お母ちゃんが教えてくれたお話が載ってる！このお話は私も持ってる！」と思うと、なぜだか嬉しくて誇らしい気持ちになりました。

教員になった今、振り返るとたくさんの苦しいことや悲しいこと、嬉しいこと、楽しいことがありました。

苦しいときに助けてくれるのも、楽しい気持ちにさせてくれるのも全て「誰か」がいるからです。

そんなたくさんの「誰か」に助けられて今の私がいますが、その原点は母が勧めてくれたこの本だと思います。

そう考えると本の力はすごいなぁと思います。

皆さんもそんな「誰か」やそんな「一冊」に出会えますように。



## 図書返却のお願い

図書館の本を借りている方で、**卒業予定**の皆さんは、

**2月19日(水)出校日**

までに返却をお願いします。

**入年次・中間年次**の皆さんの

**最終貸出日は2月14日(金)です。**

**2月21日(金)**までに返却をお願いします。

※授業や進学等で本が必要の際は司書にご相談ください。



様々な困難の中、夢の実現に向けてがんばった。～5名の  
先人の人生を味わってみませんか。

『ボクの音楽武者修行』 小澤征爾著 新潮文庫 914/オ

昭和34年2月、24歳の小澤は欧州移動用のスクーターとギターを抱え、神戸港から60日余りの船旅(貨物船)で単身フランスへ、世界的な指揮者コンクールで1位となり、その後もヨーロッパ各地での演奏がクラシック界の巨匠たち(カラヤンやバーンスタイン等)に認められ、その指導を受け、翌年にはニューヨークフィル管弦楽団の副指揮者に就任し世界で活躍する(世界のオザワ)チャンスをつかんだ。



『仕事をつくる～私の履歴書』 安藤忠雄著 日本経済新聞出版 523.1/ア

中学二年の時、自宅の改築工事で若い大工さんの働きを見て建築に興味を持つ。家庭の経済的理由と学力の問題から大学進学をあきらめて独学で建築を学ぶ。自分の足で日本の寺社やヨーロッパの一流建築物を見て学び、資格を持たずに建築の仕事に就き、実務経験10年を経て一級建築技師を取得。当人は大学は出ていないが、東京大学から教授に迎えられる。

コンクリート打ちっ放しと採光に特長のある個性あふれる建築で世界的に高い評価を受ける。

鹿児島大学の稲盛会館(市内郡元)も氏の作品。

『青春を山に賭けて』 植村直己著 文春文庫 786/ウ

7人兄弟の末っ子、家の手伝いから逃げ、学校ではイタズラ小僧だった少年は大学で美しい山に出会う。大学時代ドングリとあだ名された純朴で小柄な青年はわずかな金と片道切符を手に日本を脱出。様々な苦難の末、五大陸最高峰登頂(世界初)達成や北極点単独犬ぞり旅12,000キロ・グリーンランド横断・アマゾン川イカダ下り等の大冒険、ケタ外れの世界放浪記。

登山家の野口健氏は高校停学中に本書を読み、山に登り始めた。



『「どうせ無理」と思っている君へ』植松 努著 PHP 159/ウ  
『好奇心を「天職」に変える空想教室』植松 努著 サンクチュアリ出版 159/ウ

小さな町工場から自家製ロケットを打ち上げ、それまでの宇宙開発の常識をひっくり返す。周囲の「どうせ無理」という言葉とつねに闘いながら、夢の実現に向けて頑張っている研究者兼経営者。全国各地の講演・ロケット実演を通じて子どもたちに「夢をあきらめないこと」の大切さを訴えている。YouTube動画「思うはまねく(TEDx)」は807万回視聴。

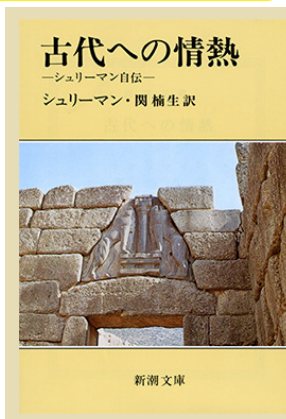


『古代への情熱』シュリーマン著 岩波文庫 289.3/シ

『古代への情熱—マンガで読破』シュリーマン原作/

バラエティ アートワークス企画漫画 イースト・プレス 726/シ

少年時代に読んだホメロスの叙事詩「イーリオス」に描かれたトロイア戦争の話に感銘を受け、真偽不明の伝説と考えられていたが、実際にあったことと考え遺跡発掘の夢を抱く。長年の苦勞の末に貿易商で巨富を得たシュリーマンは、その財力を基に小アジア（トルコ）の発掘調査・古代史研究によりトロイアの遺跡を発見。その後もミュケーナイ・ティリンスなどの発掘を続行し考古学的成果を上げた。（書影は新潮文庫版のもの、当館蔵書は岩波文庫版）



これらの本を読むと、どの著者も、好きなことや夢を長い時間いつも心に抱いて生きてきたことが分かります。

好きな事だからこそ、つらい時でもがんばり続けることができたのではないのでしょうか。

夢を思い続けると、「夢のイメージが具体的になり、次の行動につながり、夢の実現へと少しずつ前進していく。」らしいです。

さて、みなさんの夢は何ですか？

まだ知らない、自分でも気がついていない夢があるかもしれません。

図書館にはあらゆる分野の本、約2万3千冊があります。

本校図書館にない本も県立図書館から取り寄せることができますよ。

（相談してくださいね。）

夢がある人も、まだ何が夢か分からない人も、将来夢へとつながるかもしれない「好きなこと」や「楽しいこと」を、図書館で探してみませんか。

